

日中地震防災学術シンポジウム 開催報告

2008年10月8日～11日に中国四川省成都で、防災科学技術研究所、日本学術振興会、中国科学院国際合作局の主催、文部科学省、中国科学院の後援により、「日中地震防災学術シンポジウム」が開催されました。

日本からは防災研究機関や関連学会を代表する方々をはじめ20名、中国からは関係者、分野の専門家をはじめ約80名の参加があり、中国科学院水利部成都山地災害・環境研究所がシンポジウムの主たる実施機関を務めました(写真9)。

初日は、縦約5m、横約3mのくいちがいが見られた地表地震断層(写真1)や、震源地の近傍に位置したが致命的な被害は免れた紫坪鋪ダム(写真3)、世界文化遺産である都江堰(写真4)などの巡検を行いました。

その後2日間、午前8時から午後6時半までの会議を行い、開会挨拶(写真5)の後、第1部(基調講演):地震と減災、第2部:地震のメカニズムと予測、第3部:二次災害のメカニズムと予防技術、第4部:災害の応急管理と復興、の各セッションが設けられました。

第1部では、防災科研の岡田理事長から1995年兵庫県南部地震後の日本における地震防災研究の報告(写真6)、砂防・地すべり技術センター池谷理事長から日本の天然ダム形成とその対策について総括的な報告(写真7)が行われ、中国からは、王思敬中国工程院院士による工学的観点からの地震災害評価、国家減災害センター李教授による中国の地震災害の応急管理の方法、成都理工大学副校長黄教授による四川省汶川大地震による地すべりの分布とメカニズムの紹介等がありました。

第2部では、日中の内陸地震のメカニズムや特徴の比較、今回の地震の地表地震断層調査結果や、地震メカニズムの調査結果、内陸地震の予測研究の紹介、などの発表がありました。

第3部では今回の地震による地すべりや水害、ダム、トンネルの詳細な被害調査、地震災害がもたらす長期的影響、E-ディフェンスによる学校建物の耐震性の研究、中国からは、今回の地震を含めた、各種土木構造物に関わる被害と研究状況の紹介がありました。

第4部では、汶川大地震の復旧復興のこれまでの総括、日本における兵庫県南部地震後の復興の分析等の発表があり、最後に、日本からは、濱田政則前土木学会長から世界的にみた自然災害の現状と災害復旧にかかわる国際協力についての講演(写真8)、中国からは、Deng Wei 成都山地災害・環境研究所長から山地の復旧復興計画についての技術的側面に関する講演がありました。

今回の会議では、地震の発生メカニズムから、災害研究、復旧復興事業と、幅広い課題が取り上げられ、それぞれの分野で中国と日本の国情の違いが鮮明になるところもありました。会議を通して、お互いに協力関係を維持していくことの重要性を認識し、今後の協力推進のためのキックオフ会議として有意義なものとなりました。



写真1 震源地における地表地震断層の視察（虹口地区）



写真2 谷を埋める巨大転石（写真1 撮影位置の近く）



写真3 紫坪鋪ダムの視察状況



写真4 都江堰の被害（白い筋が被害を受けて補修した跡）



写真5 開会挨拶を行う増子地震・防災研究課長



写真6 基調講演を行う岡田防災科学技術研究所理事長



写真7 基調講演を行う池谷砂防・地すべり技術センター理事長



写真8 第4部で講演を行う濱田早稲田大学教授と座長を務める林京都大学防災研究所教授



写真9 シンポジウム参加者の集合写真